

石綿敏雄著『外来語の総合的研究』

田 辺 洋 二

最初に、この書名「外来語の総合的研究」に注目する必要がある。外来語とは基本的に、外国語を借用 (loan, borrow) して国語の中に取り入れた語なのだが、その語に関連して種々の言語学的な研究分野がある。語の成立の過程や時代、言語接触、すなわち元の外国語と日本語の接触、または到来した諸外国間の接触もある。日本語に入れば、名詞や形容詞といった品詞、単語や複合語のような語形、表現、表記などの問題に入り込む。和製英語もある。いかにも英語から借用したように見える語形でありながら実は日本生まれの語だ。これからは和製○○語もできるだろう。消えた語もある。このような研究範囲を視点において、本書では歴史的観点から東洋外来語 (漢語系統) と西洋外来語 (カタカナ語系統) を総合的に捉える外来語研究の立場に立つ (p. 8)。

現代の西洋系外来語の場合は、特に語自体が庶民の生活に関わるので、生き物のように日毎に増える。その研究となれば、学問的に地味なものもあれば、新語として雑誌の記事に面白おかしく扱われるものもある。要するに、外来語の研究は極めて切り口が多様なのである。著者は、このような多面的な範囲の各々について、長年にわたり実地に検証しながら、学問的な外来語研究を集

積して現在に至ったのだが、著者の理論の集大成が題名の「総合的」に当たる。そして、本書がその書名にふさわしい内容の著作であることを、先ず紹介しなければならない。

著者も記すように (p. 88)、本書のデータボックスは著者編の『基本外来語辞典』(東京堂出版 一九九〇) である。この辞書は、榎垣実編『外来語辞典』(東京堂出版 一九六六) の流れを汲むものである。当の榎垣氏は、同書の「はじめに」に「国立国語研究所員石綿敏雄氏は、終始この辞典の編集に全面的な助力をあたえられた」と石綿氏の実質的な貢献を明記している。すなわち、石綿氏は『外来語辞典』での作業も含めて、外来語研究専門の研究者として、また教授として外来語研究の主流にあり、言語学者として種々の切り口に直接的に立ち会ってきた。参考文献リストが示すように、研究の動向を捉え、適性規模の科学的な調査を続けてきた学者・研究者なのである。その結果、本書は『外来語辞典』及び『基本外来語辞典』に集積され整理されたデータを基礎に、調査と分析を行い、実態を総合的に考察して、氏の外來語研究の理論構成を示した研究書となっている。

本書の構成は序章と3つの章からなる。序章では「外来語」の定義をはじめ、東洋外来語と西洋外来語の性格を論じる。第1章「現代日本語のなかの西洋外来語」では、私達が日常に触れるカタカナ語について、さまざまな角度から検討を重ねる。まず、新聞、教科書、テレビ、辞書などに出るカタカナ語の実態に関する記述。ついで、外国語がどのように日本語化するのかの説明。1音節語の *smile* が3音節の *スミス* に変わる母音の添加の問題、音

の置き換え、アクセント、つづり字発音、語形省略など身近な現象を解説する。形態的な問題では原語から日本語化する際の品詞の問題、さらに和製複合語の問題にも進む。さらに意味の拡大と縮小という外来語特有の意味構造と変容、そして外国語としての日本語教育に関わる問題を論じる。

この書評の筆者は英語が専門なので、見た目が英語のような、和製複合語について特に興味を持ってきた。英語の場合は、複合語の分類を sunrise「日がのぼる (S+V)」、cigar smoker「葉巻を吸う (O+V) +人」のように主述関係や用言関係で構成を分析し、語に与えられるアクセントの強さで複合語の構造を分類するのが一般的である (Quirk et al. pp. 1567-1568)。それで、日本語の和製複合語の場合は英語とどのような相違があるのか、という問題に関心を持ってきた。本書の「和製複合語」では、類型別による英語との直接の対比はしていないが、和製複合語の持つ語形、意味の含み方の問題、また用言中心の説明は用いたいことや、その他分類上の問題点などを例と共に指摘し、和製複合語に関する考え方を示す。本書の見解は、視点を英語からとった筆者個人にとっても、多くの示唆に富み、貴重な指針となる。

第1章の後半は、カタカナ表記と語の表現の問題を取り上げ、さまざまな観点から深く掘り下げ、多岐にわたる例をあげて、前半同様、きわめて興味深い内容となっている。この分析によって、日本語のなかのカタカナ語の特徴を、長所と短所という表現的確に示す。その長所は(1)語彙が豊富になったこと、(2)国際的にそのまま通用するものがあること、(3)日本語にはなかった

ティ、デイが生まれて、日本語の音節構造のあなをうめて整然としたものに変わったこと、を挙げている。一方、短所としては、(1)「話し」と「話し手」という造語の関係が、「話し」と「スピーカー」という関係になり、造語体系が破壊されること、(2)は「シミュレーション」が「シュミレーション」のように誤用をもたらすこと、(3)外国語産であるため、自国語だけの知識では理解できない、または理解しにくいこと、を挙げている。(2)と(3)には興味ある問題が昔からある。(2)の例では筆者の父親が「ブラットホーム」を「ブラットホーム」と言っていたことを思い出す。「ぶらっと立つ」のイメーজか。(3)の例では、最近の「インフォームド・コンセント」や「インブリケーション」など。へたをすると大学生でも理解できないのではないかな。

ここで注目に値することは、本書では、漢語の持つ破壊性を取り上げてのことである。「殺虫」「造園」といった「どうする、なにを」という語構造は、日本語本来の「虫とり」「庭造り」といった「なにを、どうする」という語構造を破壊すると言っている。筆者も、駅の切符販売機を「券売機」とするのは、漢語の性格から「売券機」とするべきではないか、と考えていたが、「虫とり」の構造から言えば、「券売機」は日本的な構造なのである。日本人は筆者を含めて、かなり漢語と英語の語順に影響を受けている。このことを自省をこめて強く感じた。

このように、カタカナ語の特徴分析の後には、さらに社会階層と言語生活の関係、普及度、理解度、行政で使用するカタカナ語というように日本文化との接点まで深化し、最終項は「近代西洋外

来語の歴史」を克明に説く。本書のおよそ半分を割く150頁余で章を構成し、まさに正統的なカタカナ語論の総合研究であり、読み物としても非常に興味深い。

本書の後半は第2章と第3章からなる。第2章は南蛮船貿易で大航海時代のなかの日本と外来語を映し出す歴史を語る章である。「日本語のなかの西洋外来語の歴史」として江戸時代までのポルトガル、スペイン、オランダなどとの接触を通して、南蛮船時代の外来語、江戸時代前期のカタカナ語、江戸時代後期のカタカナ語を扱う。この時代はキリスト教の布教と関係が深い。一六〇〇年の関ヶ原の戦いを境とする前後六十年はシャビエル(ザビエル)の上陸(一五四九年)から島原の乱(一六三七年)に次ぐポルトガル船の来航禁止(一六三九年)までの時代とする。その揺れ動く時代の言語環境や言語生活などが宗教、通商、一般用語の豊富な例によって示され、その用法、音変化、語形のゆれなどが論じられる。

筆者は英語研究の立場を頭に置きながらこの章を読み進んだが、カタカナの外来語を通して当時の日本社会が垣間見られ、言葉のダイナミズムを強く感じた。南蛮ものの流行と語彙の流入(p. 186)の「かはん、カッハ」(合羽)の話を読むと、まるで現代のファッションを感じ、終戦後の英語カタカナ語の流入と社会の変化を重ね合わせ、外国人に対応した「豊臣秀吉」の人間臭さが伝わってくるような感じさえした。また、この時代は英語の歴史ではイギリス、スペインなどによる大西洋三角貿易によっ

て、黒人が西アフリカから北米大陸に運ばれる時代と重なる。日本も世界の大航海時代の渦の中にあつたのである。南蛮船時代から江戸時代後期までの第2章はおよそ80頁の歴史書である。

第3章は外来語の対照言語学的な考察の章である。「対照」とは異言語を付き合わせて比較研究をすることで、漢語、ラテン語、英語、フランス語、ドイツ語、スペイン語、中国語、マレー語と多くの言語との関係を扱う。特に、英語とフランスにおけるフォザミ(仏 faux ami ≡ 英 false friend)「見せかけの友」の問題を論じる。外来語になると意味の拡大や縮小が起こり、原語の意味と変わってしまう問題である。仏 demander と英 demand (p. 279) など種々の例を挙げて考察する。フォザミの問題は、日本に入ってくる外来語に多面的に関わる興味ある問題を含む。

本書の末尾には、参考文献リスト(11頁)、あとがき(5頁)、カタカナ語索引(30頁)がある。特にあとがきは著者の研究の経歴と姿勢とを語る部分で本書の理解には欠かせぬ部分である。あとがきに記されている著者の他の関連書と共に、本書が外来語研究者のよき指針となり、さらに外来語研究や外来語辞典の作成にいつそう寄与することを念願するものである。

参考文献

Quirk, R. et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.

(二〇〇一・三 東京堂出版 A 5判 三六〇頁 七〇〇円)